白途

鐵檻の細きを握り見かへれば瀧は木の閒にな
りつつ白き

向ひつつ馴れて忘れし瀧の音ここまで來たり
今思ひ出づ

香落溪

香落溪の岩壁の聯立は金剛山に似て高峻なり

夏山のくらき茂みをぬけ出でて岩の柱は陽に
屈きたり

車行く道の曲れば曲りつつ長くたかしも大岩
壁は

驚きて人と見あぐる眼は少し大岩壁の半にいたらず

突き出たる腹のみし見ゆ岩壁の頂はなほ上にしあるらし

晴れ澄める眞夏大空立ちつづく岩の間に一筋狹き

小太郎落

山峽の眞夏大空晴れ極まり大岩壁に雲はかからず

夕日今斜にさすや岩壁のわづか高處(たかど)に光の見ゆる

谷深く大岩壁の投ぐる影夕かたづける水をくろます

深谷のくらきにたぎる水の音大岩壁に響きかへらふ

大野石佛は室生寺の道にあり川を越え榛莽を拓きて拜む

うす黒く佛の御像見せつつも大石壁は陽に背き立つ

御佛の御面御衣に影つくり石より浮かす正午近き陽は

親しげに佛ぞ見ます御座のもとの茅萱からたち分けつつ仰げば

秋陽

河内の金剛寺は長く南朝の皇居となり一時は北朝の御門も同じ處に居たまひしかば共に觀月の御催もありきと傳ふ

古(いにしへ)のおほましどころ畏みて入れば門邊の秋陽(あきひ)暑しも

襟解けば胸に入り來ぬいくつ夏御袖すずしく通ひけむ風

還りますその日近しと事そげる御座にましつる朝夕かしこ

御心の隔もあらず見ます夜とこの大庭に照りにけむ月

夕靄

伊豆伊東なる松川の暴漲を夕方行きて見る書無の森の後の堰塞を超ゆる河水そを被ひて流るる暮靄共に悽怡なり松川一に大川ともいふ

夕暮の大川堤大波のあたる響に底とよみする

書無の森のおくよりおこる靄夕松川の波になづさふ

堰塞こす早瀬の波に曳かるらし自づから下る夕暮の靄

立ちおほふ夕川面の靄の色淀なせるところ濃くして暗き

越えなづみ堰塞を前に起る波白く捲きあがる靄の底ひに

さしおほふ大樹の枝ぞみなゆらぐ川のつくれる夕とどろきに

川波の上を重たく動く靄橋の下びにいたりて早き

重りゆく夕べの靄をうちゆすり暗く聲あぐ早瀬の波は

霞ケ浦

夕風の荒きを含み逆ひ行く舟てふ舟の帆は球のごと

破るばかり帆をふくらませ走る舟速からぬ見れば網ひくらしき

わが舟のはてむはいづく火の一つ見えぬ岸邊
のか黑く長し

北京行

山海關にて內地貨幣を交換す

寢臺の溫きを下りて金かへに出づる國境の曉
の冴え

萬里長城初めて見ゆ

目の前を流るる靄の上に出でて長城は續く曉
の山

片面を右に左に見せつつも長城は山の黒きを
うねる

大石獅紫禁城の正門なる午門の左右にあり

敷瓦凹みおほきを履みて見る石大獅子の愁ふ
る姿

傾きて巨き口張る石獅子に見下されつつ人の
小さき

近づきてただに仰げば口張れる石の大獅子顎
ばかり見ゆ

故宮

當時の御物靜けき中にありて數多時計の一度
に鳴るも

列なれる玉石硯壺鏡古きにほひはわれ等を蒸
すも

聳え立つ殿と樓とに區切られて狹暑き空の下に息づく

市中所見

夥しく道の楊の落葉すすわり目つぶる駱駝の背に

煤山

土しまく正午のあらしの下に見る古き都のくらくあかるき

捲き上る巷の埃赤めつつ夕とどろきの中に灯ともる

萬壽山長廊は昆明湖に沿ふ百三十餘丈ありといふ

陽にひかる湖の小波に面ほてり長き畫廊は行き飽きにけり

長廊の半に來りふと思ふかかるものありて國は傾く

昆明湖上

老いたるは西太后の舟人かゆくらゆくらに櫓を押しすすむ

中山公園曲廊

いかさまに曲れる廊ぞまともにも今し分れし人向ひ來る

孔子廟

靜やかに古柏蔭ふむ門入ればすなはち起るつましさより

北海公園九龍壁

わが揚ぐる波にいよいよ狂ひ立ち珠の行方を龍失へり

瑠璃廠書房

次次に人の持て來る古き書手觸れながらも呑む茶のうまさ

見もはてで前にかたへに重ねゆく書おのづから我を埋めつ

語こそわかね持ち寄る書を手に笑めば笑みかへす人ぞ親しき

持ち來るを不用といひてはかへしやるわが讀みし書の少なくはあらず

紫禁城角樓

傾きて低きよりさす夕日かげ黄金の櫓中空に見す

櫓反れる黄金の櫓沈みつつ強くさす陽に陰保ち照る

照りわたり光の限見すれども衰へて行くものはさびしき

市上雲雀を籠より出しまた籠にかへして樂しむ人あり

鳥すらもなづける見れば疑ひて戰ふ人の族ともなし

啼きつつも下り來る雲雀籠にうけてさて笑み
のぞく人は樂しげ

放たれて啼きはのぼれど籠の雲雀上るかぎり
は上り得ぬらし

つなぎたる絲に牽かるると見ゆばかり放てる人
の手に落つる鳥

細やかに羽根ふるはしてたつ雲雀雛にかあら
む高く上らず

天壇新年殿

朝空のつよき綠を圓く切る瑠璃に匂へる殿の
高屋根

色といふ色の光に目眩く殿の眞中は居どころ
ならず

圓丘

中空に身も浮くここち限りなき白き清さの中にし立てば

喇嘛寺

ささへたる鐵も錆吹く喇嘛寺の牌樓危く鵲居るも

常ならぬ笑をふくめる佛の前明らかにして物凄じき

讀みあぐみ古き經より外らしつつ雛僧は笑の眼を我に向く

古殿のいくつに見てか我の來し佛めきつつ妖しき佛

寂然と殿の奥處に相住みて人と獸と魔と久しかり

東安市場

肉の香に果物の香に人の香に醉ひて夜行くく
ねれる路を

皿の音物切る響人の聲まじり湧き立ち夜(よる)の氣
濁る

劇場

語こそわかねまさしく正は邪に勝たぬなるら
し人縛られつ

ましぐらに樂の流を切るがごと敵役(かたきやく)かも鋭聲(こゑ)
をあぐる

汚吏をしも打ち取りつらむ髯男首級かかへて
強く見得切る

昭和十四年

朝拜

二重橋

わが車今し交れる大御橋朝の陽(ひ)負ひてわたる
車に

大宮の御門の霜氣參(さ)う上る臣の心を締めて嚴
しも

御廊下　參集所

粛粛と臣等の履めば御廊下の厚き絨毯音も立てざり

初日さす御窓の卓の塵なきに臣等つきつぎ絹帽置くも

灯は照れど隈なほおほき大殿の壁に明るき百くさの花

眼の合へは明るく笑みて人の群のところどころに知れる顔あり

正殿

出御待ちて並み立つ臣等ひそやかに笑はかはせど語には出でず

打ちならぶ人に聲なしおのづから身こそ堅まれいでまし近し

御廊下と思ふ奥よりひびきつつ長近づく御靴の音

畏みて臣等並み俯す殿のうちに今御靴の音響き入る

御靴の音遠ぞくとおぼゆれど伏せる面はなほ上げかねつ

寢臺

汽車にて

本とりてまづ横たふる身につきて重き毛布は隙を見せずも

床角の眞夜の電燈くらければ中中に文字のしみじみと見ゆ

知らざりし意義(こころ)も見えつ暗き灯(ひ)に一字一字を
辿りて讀む本

背ににぶくあたる響を感じつつ夜半思ふこと
のほしいままなる

徒(いたづら)に照らすともいはず本持ちて寢る覺むるわ
れを灯(ひ)の見守るも

いづこともわかず覺めたる眞夜なれや電燈つ
けて本讀まむまた

松籟

今年また例の如く病む熱高し妻のはことに高し夜夜風あり

妻とわが惱みを深みものいはぬ閉に起る庭松の風

惱む夜の心の波に乘る如く落ちてまたたつ松風の音

風ややに遠ざかれども庭松に含む響の深き眞夜中

手握ればふくらみぬくき掌(たなそこ)にしるし熱また高まらむとす

かくながら病むも樂しと思ふこと心の隅にいまだ殘れる

心なほ安きところを殘すらし樂しき夢をわが
見たりけり

繪詞

皇紀二千六百年記念の大繪卷の詞書を俄に囑せられて
書く料紙の金銀の砂子切箔燦然目を眩す

灯の下に書きし急げばとる筆の穗尖ぞ狂ふ紙
の光に

皇國建てます神の大御業ここにと力入れ上げ
書くも

思はざる筆のすすみにたやすくも神の御名を
書き果てにけり

かしこきや肇國しらす大勅うつすと呼吸を調
へかへす

紅梅その他

紅のふかきにほひも限あれやするゑ白けたる紅
梅の瓣

うす赤う陽にぞふくらむ少女子の乳首あつめ
し丁子の蕾

朝風の吹き澄ましたる空にありて花ふるはす
る初櫻の枝

黄に熟れし皿のめろんの露に照る春深み行く
宵のともし火

比田井天來氏は近來書界の巨匠なりき葬儀の日堀の内火葬場にて

人のたく火にぞたやすく任かせつる天の手にして成りにし器

富士の頂のみ大きく描ける畫に

中空に積れる雪の光より東の國は今日も晴れなり

女子學習院卒業後十餘年の人人會合席上

年を經て匂まされる人に今見すべからざる顏見せ居るも

南河内弘川寺

梅にまだ朝の陽ささぬ古寺の清き寒さの中に膝組む

妙義山

音すれば小笹の中に踏みて入る蝮蛇を探す山
案内は

むらがれる緑をぬけて岩の秀は競ひ立ちつづ
く黒く鋭く

岩かげの青葉の中を山の子は竹に蝮蛇をから
ませ來る

咲き初めし深山躑躅か日に背き立てる岩間の
薄紅は

身の重み膝にもたせて尖りたる岩より岩に足
懸け登る

岩角を鎖を手にしつつ廻るを鎖の横這といふ

傳ひ行く岩より離し引き伸ばす鎖の重み手に感じ來る

鎖にすがりつつ下るを鈎瓶落し片手落しといふ

初夏の光さす岩をくだりつつ手握る鎖程よく熱き

幾百人磨り減らしけむ岩の窪足をかくべくあまりに淺き

伸び切れど足はかからぬ岩窪に鎖にすがる身をねぢむくる

石門にわが見とほせば上野の綠廣野に陽のうち煙る

近畿を行きつつ

葵祭

練り出づと眞正面に見れば行列の花も車も重なり動く

先導の騎馬の蹄の立つる音のたまさかにして列は近づく

首上げて舞人行けば緒のかげの眼鏡の陽にきらめくも

搖らぎつつわたる花傘影はやみ祭今年は慌しかり

鞍馬寺

廻り入る御堂の奥の常燈明ほのあかき暈をつくりて燃ゆる

春日野

日を永み夕近づけどかげろはぬ野に白けたる
藤の花散る

石舞臺

傳ひ下りて指さき觸るる玄室の壁夏しるき温
みをもてる

高野山奥院

若葉透く陽を青みかも新しきおくつきの石も
苔づきて見ゆ

山ながらさす陽明るき川底の砂に影おく斑を
もつ魚は

支那小説を讀む

陣門のひらけあふところ英士あらはれ金鼓亂
れ響きて戰史は成るも

極まれる才を賞づとて美婦嬌女爭ひつづくる
情史のたのしさ

義士烈士劍俠盜俠奏し出づる英雄譜こそ聞く
にかひあれ

天に代り地に義を布けばおのづから賢臣はつ
くる公案ものを

落ち來るや天罡地煞惡星のかがやきありて地
に道見ゆ

神も魔も獸(けもの)も禽(とり)もまじり居る怪奇の國は人恐
れしむ

天地をはた海山を一つにし神魔作家は語るし
づかに

暗き都

防空演習の夜屋上展望臺にて

ともし火を今しも消(け)ちて夜(よ)の都大き力を滿へ
靜もる

ともし火の消えし都の夜に垂るる星の御空の
あかるさ重さ

光なき夜の杜宇火を消つととよめく群の上啼き過ぐる

燃えあがる火のかげ人の聲はあれど破れず夜の重きしじまは

杜宇鷺とつぎつぎわたる夜の御空に起る飛行機の音

飛行機の一つともしの流るるを夜の目鋭く空にし逐ふも

かかる夜の來むと思はねど思ふ心のくづれむものか

夜空

更けて夜の大都のほこり静まるか目ざむる星
の光に逢ひぬ

夏ややに深める夜空あはれなり星の下ゆく五
位の鋭聲に

古葉みな苔におとして群竹はみどり濃き葉を
陽に向けて立つ

浅き水流れひろごる白砂にやや暑き陽の影し
きらめく

繁り添ひくらき馬酔木のひま通し午後の陽光
ぞ花あらはせる

陽の照ればあかるく綾を織り亂しさ波さざ波
さざれを行くも

岡島寛一君彼の地にありて軍務の暇日本語を教授するよし報あり

「アイウエオ」「君」「僕」「御早う」「ありがたう」君教ふるかか
かる順序に

本間桐人君の御子失はれたるに

神はまた賜ふならめども失へる魂のゆくへを
おひ止まざらむ

甲斐水棹女史を歎く

ただ一目あひ見つるのみ遂にかの見えざる國
に君を去なせつ

釣橋

谷あひは照る陽の集ひ釣橋の燒けし針金握る
に堪へず

荒山の心のままにたぎつ水橋の板間に見えて
吼え立つ

半來て目まひを押ゆたゆたひも許さぬ橋の板
の搖れやう

岩崩す水電工事爆音は蜉にはねかへり空にひ
ろごる

此處よりは烏も來ずといふ谷の水のとよみの
高くてさびし

い照る陽は早くも秋の色なせど深山若葉は萠
えの明るき

立ち被ふさ霧を厚み谷底の洞の温泉は下り處
なし

洞に滿つ霧と湯氣とに包まれてうるむ裸形の
人の輪廓

湯にひたり見あぐる洞の霧にさす天つ光は虹
より淡き

樹影

深夜京都より松江に向ふ

樹のかげと月の光と交りあふ谷間夜深き水の音かな

松江の旅館臨水は宍道湖の岸にあり

白けたる月の下より流れ來て湖にしづもる曉の霧

傾きてひかり斜にさす月に上澄む水の波動く見ゆ

出雲大社

畏みて纒ふ淨衣のおもき袖まだ降りたらぬ雨に暑しも

大殿の軒の雫ぞ暈をなす畏まり著る淨衣のうへに

美保の關に近き大根島は極めて平坦なり

みぎはより直ちにつづく廣畑心平らに人立つらむか

美保の關

上り來て月のなぎさを黒めたり隱岐より著ける旅人のむれ

眞日照らふ沖は薄れて黒みもつ綠に滿ふ山下の海

陽のさせば波の浮霧末晴れて出雲大富士あまり目近き

關の五本松

午に迫る梢梢に風をなみ下草蒸れて松暑き山

濱木綿

白濱

濱木綿も道のくさなる南(みんなみ)の濱にふむ砂白くて厚き

鵜崎三段岩

危さを越えて見る眼も屆かざる崖(がけ)の下かも波の音(と)重き

千疊敷

沖つ波はふる汐風わが肌に汗もとどめず大らかに吹く

岩窪にたまり澄む汐朝風に清き水皺(みしわ)を立てつつ多き

勝浦の狼烟山よりはるかに那智の瀧見ゆ

夕煙る山に向ひて眼を細め見れば見えくる一筋の瀧

平維盛入水の島といふが沖に見ゆ

かしこまで漕がれむだにも苦しきに死ぬと乘りけむその人悲し

島廻りしつつ

沖べより背伸びくる波倒るれば舟も傾く島も傾く

流れ入る汐に曳かれて島の洞くぐり今抜くわが舟あやな

いかさまに廻り來し身ぞかへりみる島と島とは重なりつづく

新宮浮島

足ふめば草のかき葉も皆搖れて半成りたる國此處に見ゆ

那智

滝打ち開けたれば大岩壁を傳ふ瀑殘りなく見ゆ瀑風によつて動く
瀑下より見青岸渡寺より見蓬萊閣より見つつ

風もなき杉の下路歩みつつまだ見ぬ瀑の冷たさ感ず

大杉の梢のひまの空白しすはこそ瀑は見え初めたれ

壁立てる大きいはほにあたる陽の光の中に瀧落ち止まず

なだれ來てしばし空なる瀧の水岩にうちあたりとどろき下る

仰ぎ見る瀧の岩ねに生ふる木木大きからむも草とひとしき

岩下りて仰ぐ瀧口とがりたる雲の後追ひ後追
ひ落ち來

風こそはここに感せぬ瀧の條右に斜にくねり
初めつ

岩壁の濡草しるし瀧の條今し全く左に
寄りつ

吹く風に霧と靡きて瀧壺に落ちつく水は半な
るかも

こらす眼にさやに映りて山の瀧太まり細まり
太まり止まず

片寄らせ吹く山風の今止むか瀧は正しき位置
にかへりぬ

見つむれば眼の狂ひかも山の瀧さながら崖を
逆捲き上る

熊野新宮

雨に飛ぶ熊野烏にふりかぶる小傘にあたる大
竹柏の露

プロペラ船にて熊野川を遡航しつつ

向つ山壁立つ岩にあたるらむこだまをかへす
プロペラの音

舟にして見あぐる眉に迫り立つ雲もかからぬ
大岩の壁

うねりつつ舟の上ればうねりつつ姿かへつつ
高し巖は

底澄める溪の深淀わが舟の進めば岩の影ぞ分
るる

音もなく曇りもあらず澄み極まり立ち極まれり水と巖(いはほ)と

湛へ立ち水と巖(いはほ)と天地の深き靜寂(しじま)のなかにし久し

湯巻

外(そ)ぎ立てる耳を撫づれば尾を振りて離るともせぬ眞熊野の犬

三味の鳴る向の宿の灯(ひ)の色を含み群立つ谷川の湯氣

吉野の奥

伯母峠に上る峠は紀伊大和の間の分水嶺なり

遮りて遠くは見せねおのづから風立つ山の木は疎なり

定まらぬ形なるかな見かへれど見やれど知らぬ峯のみにして

不動窟に入る雨來る

避けて入る山の眞洞の闇の中に雨と異なる水の音する

火を上げて人は照せど闇深き中の長瀧末ばかり見ゆ

山奏谷なる某氏の別墅に息ふ旭瀧といふが前に落つ

倚る岩に日のぬくみあり向つ嶺の瀧のしぶきはここにかからず

伊賀上野古城天主閣上

古き國伊賀の上野の夕雨にくれぐれとして山のつづくも

人の指す指のさきに冷え冷えと鍵屋の辻の家のならべる

川崎氏邸

重さなれる靄にしめりて草も木も立つる香くらき夕暮の庭

車中

人の眼のあつまる窓に戸をおろし何すねものぞ富士を見ざるは

颱かもい捲き渡るか一處高嶺の雪の曇りて見ゆる

十國峠

見えや來む富士のいただきあの雲の過ぎばといひて待つ閒久しき

大野

哈爾賓途上

冬濁る空と大野の薄雪とはつかに分つ淡き日のかげ

哈爾賓郊外

からからと鐵の花輪の風に鳴りて壯士の墓に冬はきびしも

新京驛前

輪を作り輪を崩しつつ夕蒼きみ空黑むる大野の鴉

南嶺

列墓の主を語りてバスガールわれまづ涙おとしたりけり

奉天東陵

冬の風强しとにあらぬ草を薄み陵山の土荒れにけり

天津水災

濁り波揚ぐる穂尖の黒黒と光乏しき空にしつづく

黒みつつ漲る水に夕燒のにほひ悲しき空はうつろふ

水着きてここに幾月梢のみ立てる諸木はすでに葉持たぬ

濁りつつ風に揚れる波の上に何の工場ぞ白く傾く

濁り水波立つ底に崩れつつ解けつつかあらむ墓、家、鹽、岡

速瀬なす水に乘り來て夕暮の光ぞ繞る大渦の
上を

沒り殘る線路せまくも立つ小屋の火かげぞ搖
らぐ暗きさ波に

火ぞ燃ゆる食ふより外の所作なさに避難の人
ら物煮るらしき

夜を暗く過ぐる車を寢ねで見る線路に狹く小
屋する子等は

暗き夜の心照らして見え來るは沈み殘れる停
車場の火か

北京午門下瞰

擴ごれる大理鋪石俯して見る眼を白白と射かへすものか

帝王の尊さ見よと磨きつる黄金の甍の波の果なさ

大和、中和、保和、乾清、坤寧の名を圖に指せど紛れて多き

棟と棟しろうかすむる埃風黄金の甍の草を靡かす

此の國の陽のかげろへば連なれる黄金の波の穂片曇りする

樓上碑碣

窓の陽の斜にさせば影つくり彫られたる字はみな生きにけり

翠明莊

軌みつつ一輪車下行けば寢覺異なる樓の朝床

ある朝

風いまだ埃を上げず針のごと頰をさし過ぐるものあり強く

燦山　明崇禎帝賊に迫まられてここに自縊す

迫り來る仇と炎と見つめつつ書かする遺詔文字のすくなき

「罪あらぬ民を殺すな」最終のやさしき語帝ならで誰

講演

異なりて耳に響くを喜ぶか人等聞き入りて咳もせぬ

毘盧峰上

朝鮮金剛山の絶巓毘盧峰は金梯銀梯の岩壁を登りて達せらる山上にして初めて土あり

久にして踏む山土の柔かさ岩に馴れ來し足に
なじまぬ

馴れ來つる岩と違へる味(あぢはひ)にか行きかく行き土
踏みつづく

ひたぶるに踏みて味ふ山の土高き低きはものの
ならなくに

自づから身はし躍るも樹の細根交へ膨れし土
をし踏めば

踏めばただ草のここちす風を痛み土に横伏す
尺餘の樹樹を

絕巓より俯せば群峯眼底にあり峯は皆岩より成る

土に置くわが靴の尖登りつつ仰ぎし岩の頭と
ひとしき

峰に立つわが足の下苔白き岩は頭をそろへて
群るる

おのもおのも影を保ちて眼の下に群れゐる岩
の頭の鋭さ

聳え立つ岩閒岩閒に藍ふかき光沈みて谷暮れ
むとす

見おろせば下暗みたり妻もわれもよくも登り
て來にし岩壁

大谷のくらみに續く空さやに望軍臺の一列が
見ゆ

白めるは波か煙かはるばると大岩山のなだれ
行く末

久米山莊

立ちむるる末は薄れて峰の靄星多き夜の空に
連なる

消え消えと洋燈の光さしてあり探りつつ入る
山の湯槽に

温突の床のぬくみはさ夜ふかみ穩やかに身に
こたへ來にけり

高窓の外は月夜か重ね着る毛布の白の闇にし
浮ぶ

昭和十五年

紀元二千六百年

年はいま二千六百橿原の宮の眞柱さゆらぎも
せぬ

被ひ來て載せ來て天と大地とすめら御國の爲
めにし永き

月も日も手永の御代を照らすべくかかりそめ
けむ渡りゆくらむ

傳へ來し御代を思へば行くすゑの千萬年も永
からなくに

天の戸の一度あけしあしたより出でて入らざ
る日の大御國

ひさかたの天足らす世に生れあへるこの幸は
身にし過ぎずや

祖先より願ひ續けし大御國榮えひろごる御代
にし逢ひつ

限なき數に續けば經し年の二千六百永からな
くに

何にしも生るべかりしを人と生れてこの大御
代の光を浴びつ

橿原の宮の彩雲たなびくや亞細亞かがやく年
に逢ひにけり

生れあひて今年ぞ二千六百の朝の大氣に呼吸
すと思へや

極みなき清さをもちて我おほふ朝の御空をし
みじみ仰ぐ

天地のこのよろこびの中にありておのがまつ
げの濡るるは何ぞ

東より馳する光は果もなしまことに御代は天
足らしたり

すめろぎの御稜威かしこみ大亞細亞わが亞細
亞とし今ならむとす

起たしめて今こそ見せめ國のため倒れし人に
御代の光を

御手づからたまへる御旗白雲の下り居向伏す
限を征くも

新しき年の日記の見返しに太しくしるす二千
六百

擴ごりて極まりしらぬ國土に照りあまる陽を
今浴ぶ我等

大亞細亞今年興すと競ひたつ人等我等に御空
は明くる

捲きかへす世界の波の中にわれら足履みひろ
げしつかと立たむ

橿原

紀元節のあした參内せむとして

橿原の日知の御稜威今日にしていよよ照りと
ほる大天地に

あたらしき歴史の頁(ページ)いまひらく二千六百年(とせ)を
境に

新亞細亞つくりあげむといそはくを物資缺乏を言ふは何事

もとよりの東(ひんがし)の國亞細亞をばまことの亞細亞たらしめざらめや

鹽沫のとどまる限擴ごれる大八島國島にしあらず

山さぶる畝傍瑞山烏なき美(よ)き陽(ひ)さすらむ橿原の宮

賢所の御前にて

廣前の御階(みはし)くまなき朝の日に黄櫨(くわうろ)の御袍い照りかがよふ

白栲のまさごの上の菅筵さやさや履みてをろがみまつる

建國創業繪卷の詞書を完成す

書きつくる事のかしこさかかる事つたなき我
の書く事ならず

書き終へてまづこそ閉づれかがやけき金の砂
子に射られたる眼を

書きはてて力のこらず拔けし腕さ夜の机に投
げ出したり

鳳凰の御閉

歌會始の御式に參内す

仕人ら示しはすれどいくめぐりめぐる御廊は
は行きがてぬかも

御式は鳳凰の御閉に行はせらる

倚りて待つ大御いでまし御椅子のふくよかな
るも安からなくに

御閑の外は御廊やつづく奥ぶかう御靴らしき
音し傳はる

拜し終へて見上げまつれば大御影あまり近く
が畏きろかも

嘗て拜聽せしより十數年を經たり

年を經て侍べる御部屋御襖の鳳の古びも親し
まれつつ

發聲和歌の第一句を歌ひ講頌ら一齊に第二句より歌ふ

今日こそとうたひやすらむうたひ人うたひ出
でたる聲の花やか

花やかにすすむしらべの滿ち滿ちて今し御閑
は聲にかがやく

花やかさ細さ清さをうちかへし强まり太まり
高まる諸聲

拔譜「甲」にて始め幾回か變轉して「甲」にをさむ

「乙」とうけ「甲」とかへつつうたひ人しらべのかぎりしらべ上ぐるも

おのが歌ひびきそむればつぎつぎに臣等立ちあがる畏まりつつ

御製奉唱

くりかへし御よみまつればいとどしく大御心は畏きろかも

「甲」「乙」とうつるまにまに大御歌また新しく畏まれつつ

繰りかへす數をしよめば大御歌五度目なり今し「甲」なる

御池

濱離宮にまゐりて

風吹けば御池すずしき朝波の中に音して鱗飛びあがる

朝の潮濱の御池に今さすや荒くなりゆくさざなみの綾

波を吹く風に靡けど池殿の御棚の藤は房いまだ伸びず

陽をかへす波の光の眩ゆさに殿のおばしま背をむけて凭る

松の風止めば起れば池の上に櫻散り散る一しきりづつ

風に散る楊貴妃櫻松が枝にたまりあまりて波に落つるも

散りしきる岸の櫻に飛ぶ魚に風すさぶ日の池靜まらぬ

若楠の梢透きとほる朝光に青み冴えたる御苑生の苔

人垣

代代木練兵場にて

畏める九萬の子らの人垣の末は埃の雲にまぎれつ

吹きかくる埃の風に御面向け畏くもあるか皇子は立ちます

人垣の閧捲きとほり中空に赤う立ち上る龍捲の雲

中學校卒業記念會席上

ませにしもあどなかりしも今日はみな瘠せて皺もつ顔となりぬる

顔よせて一つ昔を語れども心そぐはぬものあまたあり

語らへば樂しくもあるかわが心滿たず過ぐしそのかみの事

大方はなすべき事をなしつらむ人等のしぐさ落着きて見ゆ

卒業生を送る

とどむべきすべも今なしゆくものはかくの如しとただに嘆かふ

また逢はむ日はあらめども今日のこの委なら
めや心ならめや

最後の遠足すとて人人と江の島にゆく途上

興じあひて同じ道ふむ別れつつ心心にならむ
人らと

舊卒業生會合席上

それといふ事はなけれど月と日といささか人
を老いしめにけり

甲斐水棹氏の「埴道以後」の序に

たまきはる生命をかけて咏みし歌いづれの隈
かい照りとほらぬ

天覽山

履みのぼる生徒を多み山の岩角白白と埃かぶ
れる

強き陽に陰失ひて山躑躅くれなゐの色の鈍く
匂へる

佛語學者井上源次郎君をいたむ

異なれど同じき道を歩みつつ離るべからぬ人
と離れし

登別

北海道なる登別温泉の大浴槽は世界一なりといふ浴しつつ

湯氣こむる大浴槽は岸を見ず熱ある海にわが
ある如し

雨降る夜は湯氣ことに濃しといふ

夜とともにたつ湯氣深し天地のなりのはじめ
にゐるかも我は

湯本

群れ行けば心安きか人ら踏む踏めば湯氣吹く
硫黄の山を

大湯沼の對岸の活火山の烟右折すれば空晴るといふ

ところどころ黄なる波たつ湖の上に高嶺の煙
切れてうつろふ

右にし高嶺の烟横折れぬ三日の雨は今日し晴
るるか

小有珠噴火口

春蟬のあかるく鳴けば若葉みな陽を照りかへ
し暑し夏山

踏みしめて赤土山の高蛭を生ける火口に向ひ
て下る

うち並ぶ四十火口と湖と立ちて見下す風に逆らひ

噴き出でておのもおのもにとよみ立ち山搖りけむ四十の火口

噴き止みて恐らくここに二千年しづけき山を今見る我は

連なれる火口のひまの細き道おほふクローバ暖かく踏む

火口にしならぶ白樺烟なほ靡かふ壁に影落としつつ

生ひつづく壁のクローバ波立てて火口に落ちし風吹き上る

燒け爛れ落つる限は落ちけむか峙つ岩は厚み
を持たぬ

大有珠をくだり來りて雲の影三つ火口を今立
ち被ふ

松島

鹽竈より舟にてにむかふ

群れ浮ぶ沖つ島山わが舟のへさきいづれに向
くかと見るも

連なりて一つ綠の沖つ島舟近づけば立ち分れ
たる

遠く近く浮ぶ島山隈にして波は光を放ちつゞくる

西にややなれる陽かげの透くままに島の赤松數さやに見ゆ

渡り終へて安き心にかへりみる夕暮近き島の長橋

島松の枝のくろみの隙に見る月なき宵の空のあはれさ

増子懐永君にはかに逝く

また一人君をなげけば殘るわが世にたのしさはあらぬここちす

金津於菟君の長逝をいたむ

思はずも一つの影の消えにけり消えてはならぬ影消えにけり

山崎敏夫君の校長就任を喜ぶ

事事に敏夫といへる名に背かずかかる校長の
またもあらめやも

神泉と鯉

鹿島神宮にて

緩く振る鯉の尾鰭にかたよりて芥しづもるみ
たらしの底

をりかへしこなた向きつつ搖ぎくる眞鯉の顔
の嚴かなるも

流れ入るほどは流れて出づらしもみたらしの
面は水皺だになき

まだらにも鱗はげたる背を見せて池の主かも
鯉は古りたり

いよよ澄む水の冷をし味はふか年經る鯉の身
を動かさぬ

人聲の底にやとどく大き鯉ものくさげにも所
をかふる

岩間よりしみ出づる水の一筋に浮藻の泥は片
剝げてをり

潮來

十二橋下を舟行しつつ

物買ひに行くといふなり古舟に竹の棹さす前垂をとめ

水漬ける柳の小枝浮草のからめるままに重く靡かふ

正午の風わたる水路の波動き渚高萱根白くゆらぐ

淺く澄む水路の水に里の女がおとす鍋墨清く擴ごる

いくつわが舟のくぐりし續きくる橋の數をばふと忘れたる

わが舟を見等見下して何か云ふ片檻干の古橋の上に

横堀の細き水より來たる風舟にこまごま波吹き寄する

舟行けばみだれうち散る小さき魚岸の葦閒に腹見せくぐる

輕らかに通ふ女の下駄ひびく舟今くぐる古橋の上に

大利根にひらくる水路末明みくぐり殘りの橋二つ見ゆ

北九州

寶滿山は福岡市の近くに在り昔清原元輔が路傍の木に「春はもえ秋はこがるる篭山」としるせるを見て「霞も霧も烟とぞ見る」とつけたることありその執筆を依頼せらる碑成りて立つ大きさ日本一なりといふ導かれて見且つ寶滿山神社に詣づ

山高み蜓ひろければ細く見ゆ太く太くと企てし文字

神います森の冷たく嚴しきに梢の蟬の啼き憚るも

門司の布刈なる沈潮閘にて海峡の潮を觀る

強き陽の光を亂す大うねり大逆潮はいまし始まる

大舟の方向こそかはれ逆潮を上らむとして退くらしも

蒼き波逆さに立てて眞夏日の大海面は脉うちかへす

立ち狂ふ大逆潮をまへにして眞晝冷たき盃を擧ぐ

岬山に陽近くなれば暗き影見せつつ動く大蒼潮は

下關停車場

窓越しに送り人らと眼をかはす漸くにして得たる席より

伊駒山淡齋莊

遠山の上の御空のあかるきに出づべき月を待ちて寢ねずも

奈良今し燈火管制眼の下の闇を電車の灯の衝き來る

大峰

大峰は修驗道の本場女人を許さざる處行者隊を組みて登る行場處處にあり

はき馴れぬ草鞋の紐の緩びより後れてはまた
人を待たせつ

薄き茶を汲みて出す手も骨なきに女あらざる
山ぞ寂しき

雲霧の晴閒を待ちて山の鳥妻や呼ぶらむ聲の
ともしさ

晝暗き杉生坂路下り來る行者したしく聲かけ
にけり

鎖懸

とり登る鎖盡くれば更にまた上の巖の眼を瞬
かす

西のぞき

雲迷ふ杉の深谷見おろすと岩のとがりに我取り縋る

眼の下の谷は湧く雲奔る雲杉の穂尖の枯すこし見ゆ

中空にうつそ身浮かす岩のぞきげに女をば許さざりけり

裏行

案内者のままに手かくる岩の罅たまれる水は氣にする閒なき

鐵の輪に手をしかくれば岩離れ獨樂のやうにも身は廻りたり

猿にしも過ぎぬべからむ手を放ち思はぬ岩に身を飛ばしたり

握りつる鐵の大輪をふと放つ刹那身はあり此
方の岩に

次ぐ人の危さ見ればよくもわれ身を宙にして
岩めぐりつる

めぐり得し岩の眞下に湧く雲のたえまに山は
黑く波うつ

脚下の崩れ白雲深谷の杉のこずゑにかかりて
散るも

鷹

丹生下社の前を大峰よりの歸途過りたるに鷹の啼く聲す茶店の老主人多年飼ひ馴らしたる鷹を籠より放ちしにあたりを離れず飢うれば餌を求めて啼くといふ

正午の風渡る音する松が枝に動くものあり確かに鷹ぞ

樫に槍に松に杉にしうつれども紛れず鷹のその白き腹

山川の高き瀨の音にまぎらはず喨喨として鷹聲を上ぐ

空狹き山の谷間をひびかして鷹の啼く音は餌を求むとか

餌を探し出でたる老者待ちかねて鷹は木と木に飛びうつり啼く

うち頻り鷹はその餌をその人の手よりならで
とせびりて啼くも

餌を探し老者歸らず低き枝に下りまさり啼く
飢ゑたる鷹は

月

伊東にありて夜夜月に向ふ月夜を逐うて出ずること遲し

日のしづむ空の光を保ちつつ夕山の端の藍鼠
なる

つき
月代(しろ)の光しさせば夕山の空のくもりの雲とさ
だまる

夕山の靄にある月光ともいふべきほどのものは含まず

今宵はや十時に近し何事か出でなむとして月のたゆたふ

同じ山同じ夜更の月ながら待ちつつ居れば堪へずかなしき

空にのみ光を揚げて月は今出づる夜山の闇は照らさず

さきだちて月よりのぼる山端の光の中を烏黒く過ぐ

鷺の啼く女松繁山夜を深み出でくる月の尖のみ見ゆ

山出づるすなはち野過ぎ岡越えて忽ち月の光は來たる

澄みに澄み冴えに冴ゆれば眞夜の雲月の前にしなりて靡かふ

大前

紀元二千六百年式典

いかめしく深きしじまに大前の大廣庭は人無き如し

底しらず畏き中を渡る風殿の御帳の紐吹きゆする

大旛のかげの小旛に陽の移り今しきららく白
金の鉾

思ふだにいやしき祖はせざりけむ大御勅を今
し畏む

大みこと畏みをればわが眼熱き底よりうるみ
來にけり

献上品歌巻揮毫

かしこめば筆の命毛いささかの長きが阻む線
の流を

尖ふるふ筆に外がれて倒られて乏しき力いよ
よ乏しき

明治天皇の御越えましつる記念碑を小佛嶺に拜す

みさかりの御齢ながら杖ほしと思しけむかも
この坂道は

行啓の日

朝くらき北の御部屋に大御影日とさしませと待たてまつる

拜謁

おほけなく面すこし上げ大御前退る時にし拜みし御姿

笠雲

沼津

笠雲のひまをくぐりて大富士の裾にさしわたる日の斑らなる

奈良

日に照らふ紅葉の上をまろび散り霰音なき淺茅生の道

降りかはりここは霰の夕時雨今し生駒のみね
曇らせる

巖立つ中は川かも散り滿ちて濡れる紅葉みな
動くなり

傍に來て馴れ馴れしげの鹿の顏今し鋭聲に啼
きつともなし

月明の夜山崎校長と安城に別る

歸りかね遠ざかりゆくわが汽車の灯の見えぬ
まで月に立つらむ

群集

岡島寛一君の歸還祝賀を行ふ通知ありたれば新宿に行く著けば會すでに果つといふ

人に逢はぬ寂しき姿新宿の宵の群集に紛れて、
歸る

年暮るる夜の新宿の人波をくぐりて歸るをぐらき路を

身長高く鬚の黒きに逢ふやとて宵の群集の上
見廻はすも

昭和十六年

元朝

輪飾の障子にうつる影もなく薄曇る陽(ひ)の穏(おだ)し
き元日

新しき體制の下の一日(ひとひ)なり屠蘇なきこともふ
さはしき朝

年壽ぐと例來る人の音もなししみじみとして
夕べとなるも

同じ日

默しつつ同じ歩みを運ぶまにまた新しき光を
浴びぬ

行き果てむ日こそは知らね知らねどもわれの
歩みはとどむべからず

彌日けに澄むここちしてわが心年經ることの
嬉しく樂しき

肅みて今年も履まむひとり我選びたる道は廣
くしもあらず

新しき年には逢へど獨わが思ひ言ふことは去
年と變らず

あらし

一月七日伊東にあり夜に入りて暴風雨いたる

吹かれつつ濡れつつ人は歸るらむ夜の暴風雨
のすべもすべなさ

樹の聲の撓めば起る竹の聲風は夜すがら聲作
るらし

吹き寄せて木叢竹叢揉むままに風は風をば生
み出だしつつ

絞るごとうめきを立てて吹きあふつ風の中よ
り風吹き出づる

微雪

ありなしの風に乘り來てかかる雪輕輕として
草になじまず

指もて彈けば殘る小薄の枯葉の溝にたまれる
粉雪

危げに乘りかかる雪乘する雪葉の上にして落
ちつかなくに

あまれるが落ちては消ゆる初雪に草閒の土は
つひに黑まぬ

撓めども土にはつかず輕輕と乘り集まれる雪
に穗草は

雲

離るれば忽ち消えて大富士の峯にさまよふ雲ぞはかなき

散り分れ消えゆく見れば雲動く頂の空は風早からむ

頂を走り下りて幾條の裂目くろぐろ雪にさやけき

奈良に宿る四邊の山皆雪あり「みよし山の白雪積るらし古里寒くなりまさるなり」の古歌を思ふ

すかすかと背筋を傳ふ隙風にその夜の人も炭添へにけむ

去年十一月本宅改造の要ありて借宅に移る書庫書齋はもとのままなれば日毎に通ふ事終へて歸るを常とす

うち置きて歸るべからぬ事多み夜毎おくるる月の影ふむ

夜毎履むわれを誰れぞと大空の眼なして月の
見てあるごとし

線

岸夫人傳藤原公任筆拾遺集切を割愛せらる雲母の上を辿れる線條剝落にあひて蒼古の趣いよいよ深し

傾ける齡のままに湧きて澄む寂しさにして引
きつらむ線

古谷の草がくれ沼に湧く水の底澄みとほる線
の色はも

行きなづみ雲母(きらら)の上にかすれたる線にし動く
物のさびしさ

うち散らひ谷の平岩越す水か雲母(きらら)の上を線ぞ
わかるる

たどられて思かそけく殘る線世に古人のすさ
びかこれは

深深と心は入れど線の持つこのさびしさにい
まだ屆かず

脇屋夫人大連にて逝く夫人は幼よりしてわが知れる人なり病むこと久しかりき

涙滿つ眼(め)をし閉づれば若かりし美しかりしそ
の日のみ見ゆ

帝國藝術院總會席上

尊くも老いたる人に交(まじ)りつついとどわがまだ
若きを恥づる

熱海に川合玉堂兒玉希望兩氏とゆく

春の陽はさし集まれど谷深み厳みじかき山かげの道

芽出しせる山を寫すと立つ人の帽子危き松の春風

鎌倉山を經七里ヶ濱を過ぎて江の島に行く

細やかに絶閒埋めて若櫻松立つ岡を白めたるかな

藍ふかく晴れたる空の下にありて大海の波のそろひてをどる

島かげは夕べ滿ちくる潮尖か道ことごとく波をかぶれる

三月晦の夕

花咲くは明日とおぼゆる宵にして樂しいかなや月出でにけり

櫻

伊東にて

朝あくる窓の障子に觸るばかり夜(よる)咲き撓む花のあかるさ

庭師來て立つる焚火(たきび)の朝煙櫻が枝をくぐりては散る

花よりも低き遠山端立(きはだ)ちて櫻咲く日の空ぞ晴れたる

夜もすがら竹の嵐に吹かれつつ朝咲き保つ庭ざくら花

夏蜜柑黄のかつ見ゆる葉のひまを畑山ざくらこまごまと散る

つむじ風花捲きあぐる午の空を郵便飛行機斜に通る

櫻花咲きしづもれる朝庭に温泉上げモーター音高鳴るも

音しつつ道に溢るる温泉の上に白く散りよどむ山ざくら花

吉野裕子氏の家集に

君放つ顕智の魚は旋律の波に乘りつつ光りて來たる

初夏の近畿

春日野

雨重き木木の若葉にうづもれて紫くらき藤の花房

春日山木の間より湧く雨の靄朝野の藤の花になづさふ

法隆寺大寶殿

檜の匂氣高き中にことさへぐ百濟觀音細く立たすも

道にて

夏しるき小草の中をうねりつつ富の緒川の行き細りたる

高野山ケーブルカーにて

身の上り行くがままに向つ山うしろの峯の高まり高まる